

# 徳山藩主歴代の事歴

會員 神 本 正 律

ことし初の例会のときに、大成寺にある毛利家墓所を參觀する會員のために、首題について話をした。その内容は都濃郡誌、徳山市史(上)に所載されてあるから、ここに再記しない。尚これについては、市史年表、市史史料、県文化史年表も便利である。

さて徳山藩は、元和三年四月毛利輝元の二男就隆が、都濃郡内に領地を分封されてから、明治四年六月山口藩に合併するまでの二百五十五年間であつて、この間に藩主は九代つづいた。それを次のようにまとめて見よう。

## 創 設 期

この期は初代就隆の治世六十二年間であり、開藩初期にあたる。その藩主は若年であつたので、これを輔佐する重臣人事がまづ第一着、次に館地の撰定及び築邸、藩主の結婚、家臣団の組成、法令の定め、財政面の算策など、開府当面のこ

とがとり運ばれた。

なかでも慶安三年六月、下松より野上村に館地を移して地名を徳山と改め、ここを新藩の治府に定めたことは、名実ともに徳山藩の発足となつて、この地の発展の基(もと)ともなつた。

## 城下町経営と改易

二代元賢は幼少のまま家督し、かつ病弱にして治世は十二年。したがつて前代からの重臣が藩政の実権を継承した。

三代元次は治世二十七年間、若くして学問を好み、詩歌に長じ、明敏剛直の性格にて、これまでの老臣政治を排斥して、自ら藩政の実権をおさめ、徳山に文学的素地を導入したり、また城下町の経営に力を入れて町名を付けるなど、名声と藩政の拡充に心を用いた。

ところで、ついに本藩との疎隔を生じて一大変事に遭ひ、

正徳六年四月十三日に幕府より改易されて、藩は中絶の非運にあった。

## 再興期

開藩してより百年にして廃絶された徳山藩は、幸にも義人奈古屋里人を盟主とする再興運動が実って、享保四年五月廿八日に再興が許され、四代元堯が家督して領地の還附をうけたが、三年にして卒した。次の五代広豊の治世は三十七年間。この二代は再出発、それは立藩のような事態であり、開藩時の如く附家老が送られて、居館、蔵本、客屋、家中屋敷割などの普請作事が相つづいてなされ、財政の運用について腐心をかさねていた。そして後見人として長府藩主臣広が任命されて、今後は本藩に対する礼讓を忘れぬよう、心構えが諭された。

## 確立期

この期は六代広寛の治世六年、七代就馴の三十四年、八代広鎮の四十一年の治世、この三代八十一一年間にして、享保四年から天保七年までにわたっている。

この期は藩政もいよいよ順調に確立して軌道に乗った時代であり、殊に就馴は名君の褒れがあり、下に名家老といわれた名古屋蔵人が居て、文教に意を注ぎ初めて藩校鳴鳳館が開

設され学者も多く出た。また家臣に譜録を提出せしめたり、藩祖の詩文の編集をした。

天保七年四月広鎮の世には、藩の宿願であった城主格への昇進を見て、これより御城と称し始めた。

## 幕末維新时期

天保八年末に家督した九代元蕃は岐陽と号し、詩文に親みて省風集がある。その治世は三十四年間。本藩でも天保八年四月敬親が襲封したので、治世は共に期を同じくして幕末維新の期にあたる。この藩政の末期において、元蕃の末弟明敬（元徳）は迎えられて本藩敬親の嗣子となり、維新の多事にかけて自ら親密にして、よく本藩を輔けて共に維新の鴻業に参画し以て藩政の終末を飾ったのであった。

（昭和五四年三月十一日例会発表の要旨）

德山藩主毛利氏略系図

